



Title	トルストイ初期作品群におけるアイデンティティの諸問題について：キーワードによる作品分析を中心に
Author(s)	森光, 広治
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54317
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【5】

氏 名	もり みつ こう し 森 光 広 治
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 3 2 9 0 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 21 年 6 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	トルストイ初期作品群におけるアイデンティティの諸問題についてー キーワードによる作品分析を中心にー
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 A. ディボフスキー （副査） 教 授 金崎 春幸 准教授 ヨコタ村上孝之

論 文 内 容 の 要 旨

本論はアイデンティティという概念を基本として、トルストイの初期作品群を分析している。アイデンティティは一般的に、個人の内的な価値観と考えられているが、本論では主体と客体である世界の関係を表す言葉とし

て使用されている。本論の定義では、アイデンティティとは他者とより良い関係を築こうとする願望にもとづいた、ある特定の領域Zにおいて、Xという点で、A=Aの命題をさす。

アイデンティティ＝同一性は哲学用語であり、古代ギリシャ哲学においてアリストテレスによって定義されている。アリストテレスの『メタフジカ（形而上学）』によれば、アイデンティティとは、A=A またはそれぞれのA＝それぞれのAという命題であった。このようにアイデンティティは古代から存在する概念である。

アイデンティティは一般にどのような文章にも含まれる命題である。例えば、Aさんは大学生である、という文章があるとする。大学生をXとすると、Xという点でA=A、つまり、大学生という点でAさんはAさんである。だがその後Aさんは大学を卒業し、教員になった。そうすると、教員という点でAさんはAさんである。このようにXは変化する。このXは、主体であるAと、それを取り巻く世界との媒介をなしている。したがって本論のアイデンティティは変化を内包した主体と客体との弁証法的関係を表す言葉である。

キーワードによる作品分析は、主に第5章で扱っている。この分析の主眼は、単語の意味を抽出して分析することよりも、対象となる言葉と、それを取り巻くコンテキストの関係を浮かび上がらせることにある。キーワードとして選んだ「自愛心」、「オリジナリティ」、「虚栄心」は、相互に関係している。これらのキーワードはそれぞれが歴史とドラマを持っており、コンテキストによって様々な役割を果たす。この分析は、本論の主題であるアイデンティティと論理的につながっている。

第5章では三つのキーワードに注目しているが、これら以外にも本論全体にとって重要な言葉がある。それは「世界」、「魂」、「自然」、「無限と有限」、「微分積分」、「カオス」などである。このうち「世界」、「魂」、「自然」については第1章で述べている。本論における「世界」は、われわれ生きる主体から切り離して考えられる客観の対象ではない。「魂」は意識と無意識を含めた心理現象の総体である。「自然」はわれわれの外部に実在する客観の対象であるとともに、われわれも「自然」の一部である。

第1章ではこの他に初期作品群の素描を行っている。これによって作品の主題をおおまかに説明している。初期作品群の主題の一つに、ロシア軍によるカフカスの侵略戦争がある。この主題はロシア軍によるチェチェン人殲滅作戦を扱った『侵入』、対山岳ゲリラ戦の陣地確保のために森林を破壊するロシア軍を描いた『森林伐採』において展開されている。またトルストイのクリミア戦争従軍体験は、戦争文学の金字塔セヴァストポリ三部作に反映されている。

ロシア・フォルマリズムの理論家ボリス・エイヘンバウムはその有名な論文『若きトルストイ』の中で、初期トルストイの創造的志向を、トルストイと彼に先行する文学伝統との格闘の中に見た。本論ではエイヘンバウムとは違った見方をしている。トルストイはカフカスの戦争に関する情報は持っていた。この情報とはレールモンTFやマルリンスキーといったロマン主義の作家の作品であり、ただ単にカフカスについての謬見である。トルストイはこれら既知の情報＝知識世界と、彼が実際に現場で目撃し理解した現実の世界とを、彼独自の美学に則り配置しているのである。これは現実とは相対的であるという芸術の原則である。

第2章ではトルストイのデビュー作『幼年時代』の構成について述べている。この『幼年時代』はトルストイの全作品の中でも最も重要であり、不思議な作品の一つである。『幼年時代』は主人公ニコレーンカの10才の誕生日の3日後、朝の7時にベッドで目を覚ます時点から始まる。ニコレーンカは何の不安も無い幸福な幼年時代から抜け出して、何が起こるか分らない不安と緊張に満ちた新しい幼年時代に目覚める。10才になったばかりのニコレーンカにとって、人生の原則は歓喜である。しかし彼は現実の世界において、金銭問題、夫婦間の不和、遊びに対する幻滅、狩りにおける失敗、偽りの詩、いじめ、体罰など不幸な出来事を目撃する。彼は不幸な現実遭遇する度に、「何故？」と問いかける。そうすることによって、彼の心理は成長とともに複雑になり、それに比例するかのように彼の理解する現実も複雑になってゆく。幸福だった古い幼年時代はすでに回想の世界である。しかしこの古い記憶はかすかではあるがニコレーンカの心に時おり戻ってくる。

『幼年時代』が不思議な作品であると言うのは、ニコレーンカの不幸な記憶でさえも、幸福な記憶と縫い合わせられることで、魅力ある不幸になっている点である。ここには不幸な現実を幸福に変える芸術の秘密がある。

第3章では「魂の弁証法」について述べている。これは偶然に起きた突発的で個別の出来事を、必然的で歴史的な出来事として捉えるトルストイ独自の創作方法である。『幼年時代』はニコレーンカの成長の物語である。彼の心理は激しく変化し発展する。その変化する心理現象の中でも特に鮮やかな記憶が『幼年時代』には記されて

いる。日常の些細な出来事も、ニコレーンカにとっては自己の成長史における歴史的道標である。

第4章ではアイデンティティの問題について述べている。この章ではまず『幼年時代』においてトルストイが人格の同一性（Personal identity）の問題を扱っていることを解明する。さらに『少年時代』から『青年時代』にかけて、他者との関係に悩むニコレーンカについて述べ、『コサック』における自伝的主人公オレーニンのアイデンティティを考察する。オレーニンはカフカスの大自然のもとでコサックとして生きるという願望を抱いた。彼はカフカスの大自然の中で、自然人として幸福な生を実現できるのではないかと考えた。オレーニンには自然を感じる能力があり、周りには美しく豊かな自然があった。彼の自然にける期待は大きかったが、その期待は幻想であることが次第に明らかになってゆく。ルソーにおいては理論的存在であった自然人を、オレーニンはロシアの辺境カフカスで実行しようとする。18世紀のルソーの牧歌的理論が、19世紀のトルストイの自伝的主人公にとって悲劇的現実であることが明らかになる。

第5章ではすでに述べたように、キーワードによる作品分析を行っている。ここで扱っているキーワードは、他者との関係の障害となる要素である。「自愛心」は初期トルストイの最重要単語であるばかりでなく、19世紀ロシア文学一般にとって重要な言葉である。ニコレーンカは他者に自分の「オリジナリティ」を見せようと努力するが、実質的な努力が伴っていないので上手く行かない。複雑で不安定な人間関係の中で、自分を「オリジナル」として位置づけようとする彼の考えと彼が実際とった行動、さらには同時代のロシア文学における「オリジナリティ」について考察している。「虚栄心」は一般にキリスト教圏では完全に否定的な要素である。何故なら聖書にはっきりと悪として記されているからである。トルストイにとって「虚栄心」は「自愛心」と紛らわしい要素であった。彼は「自愛心」と「虚栄心」を区別することに非常な注意を払っている。またトルストイだけでなくドストエフスキーもこの言葉にこだわっていた。『地下室の手記』における地下室人は「無限の虚栄心」の持ち主である。

第6章は主に『アンナ・カレーニナ』や『懺悔』にもとづいて、終着点としての、死におけるアイデンティティについて考察している。アイデンティティの問題は死において不可避的に明瞭に現れてくる。それは一般的に言って、「死後私はどうなるのか？」という形で表現できるだろう。自伝的主人公レーヴィンや『懺悔』におけるトルストイの発言は、主体である「私」と「世界」を切り離しているため、「世界」から孤立した「私」が客体となる。死においてアイデンティティは成り立たない。したがって彼らは恐ろしい死の恐怖を味わう。またこの死の恐怖から彼らは自殺に近づくのである。この死の恐怖を克服した思想が、『人生論』で展開されている。そこでトルストイはアイデンティティという言葉を使っていないが、明らかにアイデンティティについて述べているのである。その点を明らかにしている。論文の終わりの部分では、トルストイのカオスについてふれている。1857年の『リュツェルン』において、トルストイは初めて善と悪が混沌としている状態＝カオスについて発言している。彼はこのカオスを肯定する異教の神についても発言しており、これが『戦争と平和』の主題であることは、これまでの研究で明らかになっている。

論文審査の結果の要旨

森光広治君の論文は、ロシアの偉大な文学者であり、著名な思想家であるL.N.トルストイの初期作品の自伝的主人公及びその他の人物のアイデンティティに係わる問題に捧げられている。著者は、トルストイの自伝的三部作『幼年時代』・『少年時代』・『青年時代』、セヴァストポリ三部作、『侵入』、『森林伐採』、『コサック』など、主に1852-63年のトルストイの作品群を19世紀のロシア文学のコンテキストの中で分析している。

本論文は、アリストテレスに遡るアイデンティティ理論に基づいてトルストイの初期作品の自伝的主人公、その他の登場人物、作家自身のアイデンティティ思索及び「實在の心理現象の総体」として理解されている主人公の「魂」の弁証法を究明することでトルストイの作品における心理描写技法の解明に寄与している。

著者は、特に19世紀のロシア文学において特殊な流行語のように使われた「自愛心」、「虚栄心」、「オリジナリティ」など、トルストイの初期作品と同様、19世のロシア文学で重要視されたコンセプト（著者の用語では「キーワード」）を抽出し、それをロシア文学と、ラ・ロシュフコーやルソー、デカルトやカントなど、フランスとドイツの古典哲学思想との係わりで考察し、トルストイの初期作品群における登場人物のアイデンティティ

の拠り所としての上記コンセプトの意義と役割を明らかにした。

森光広治君は、トルストイの初期作品における個人アイデンティティ構築の問題、個人発達や人生哲学思想と、17-18世紀の西欧哲学思想との関連性を究明することなどで本研究関連テキストに幅広く目配りをしており、トルストイの散文における登場人物のアイデンティティ思索にかかわる心理描写技法の特徴をはじめ、19世紀のロシア文学テキストの若干の特徴を明らかにし、文学作品の言語文化学的分析の能力を発揮してきた。

本論文は、構成や概念定義に係わる若干の問題や幾つかのミスプリントがあるにも拘わらず、博士（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと認める。